

## 土木広報センター

土木広報センターは、土木広報戦略会議の基本方針に基づき、自主が主体となる活動の実施（「土木の日」の活動を含む）、各委員会や支部、関係団体が主体となつて行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行うことを目的とする。

令和元年度 土木の日および  
くらしと土木の週間 報告

## 本部

令和元年度の「土木の日」および「くらしと土木の週間」は、例年どおり全国規模で実施され、盛会のうちに終了しましたことをここに報告申し上げます。

1987年11月18日に「土木の日」を制定してから、2019年11月18日で32周年を迎えました。各支部や各関係団体の多大な協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターといたしましても、今後、より一層、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるように活動を進めていく所存です。今後とも本行事に関しまして、多くの方々のご理解やご協力を賜りますようお願いいたします。「土木の日」および「くらしと土木の週間」の実施にあた

りまして、ご尽力いただきました多くの皆さま方に心から御礼申し上げます。

## 土木の日記念行事

「土木の日」および「くらしと土木の週間」の本部行事として、「土木の日シンポジウム2019」と「土木コレクション2019」を実施しました。

土木の日シンポジウム  
2019

2019年11月24日（日）、東京都新宿区にある土木学会講堂において、シンポジウムを約4時間にわたり実施した。60人を超える参加者があり、活気あるシンポジウ

ムとなった。なお、各支部や来場できなかった人のために、シンポジウムの様子はYouTube（ユーチューブ）を用いてライブ配信した。

『市民普請』で地方をよみがえらせる——市民主導の新しい公共事業の仕組みを考える——

本シンポジウムでは「市民普請」で地方をよみがえらせる——市民主導の新しい公共事業の仕組みを考える——をテーマとし、4つの話題提供がなされ、市民普請をキーとしたインフラマネジメント

の将来像について活発な議論がなされた。

開会に先立ち、土木学会の林康雄会長より主催者挨拶があった。1914年11月24日が土木学会創立記念日であることを紹介し、「土木の日」である11月18日から、土木学会の創立記念日である11月24日までの一週間を「くらしと土木の週間」として、土木学会の活動を一般の方々に紹介する機会を設けており、その最終日の締めくくりとして今年は本シンポジウムを開催と説明した。林会長は10月6日の台風19号の被害に言及した上で、被害を最小限に防ごうと市民から構成される水



会場の様子

防団が活躍したように、市民が公共インフラに関わっていくことが重要と述べた上で、本シンポジウムへの期待を示した。

また、土木の日実行担当である国土交通省大臣官房技術審議官の東川直正氏より開会挨拶があった。東川技術審議官は、市民から行政が公共事業を委託され現在の公共事業のかたちがあることに触れた上で、今後市民が主体的に公共事業に関わることでより地域を発展させていくのではないかと今後の市民参加の意義について言及し、本シンポジウムで市民普請の仕組みが議論されることに期待を示した。



中村 圭吾氏 (土木研究所)



真田 純子氏 (東京工業大学)



金子 玲大氏 (石積み学校)



本木 啓生氏 ((株) イースクエア)



菊池 雅彦氏 (国土交通省)

シンポジウム開会后、導入として、中村圭吾市民普請グループ幹事長より「市民普請とは何か」に関して話題提供があった。中村氏は市民普請を「地方を主に実施されてきた、市民主導の、持続可能性を有するインフラ管理の仕組み」であると位置づけ、その上で、人口減少などを社会的背景として、直面する課題として、人材・資金の確保、政策面での分析と提案を挙げた。また、こうした地域マネジメントシステム(スキーム)の研究検討事例が少ないことにも触れ、課題の整理が依然として十分であることや、知恵やノウハウ等の地域と地域をじかにつなぐ情報共有が必要不可欠であることを述べ、こうした面で土木学会の役割が期待されているのではないかと述べた。

続いて、東京工業大学の真田純子准教授と石積み学校の金子玲大氏からは「自立的な市民普請のスキームと石積み学校での実践」についての報告があった。両名は地域の風景を形作る石積みの補修や技術の伝承を各地で実践している。報告では、一般的に農村の活性化などは慈善事業で行われることが多いが、補助金のみでは活動の持続性が担保されないため、補助金に頼らない自立的な市民普請のシステムをどう作っていくかが重要な課題であると考えていること、特に活動の運営が一つのなりわいとなることによって、活動の継続性が担保されると考え、石積み学校の取り組みを通じてそれを実現するスキームを探っていると述べた。

本啓生氏からは「サステイナビリティの実現に向けた企業の貢献」と題して、企業の市民活動への参画について、企業のCSR事業に対する経営支援コンサルティングの立場から報告された。近年、企業とNPOなどの非営利組織との連携や活動支援に対する事例が増えてきている。この背景として、投資家の評価の観点の変化があり、投資家は企業の財務面以外の、ESG投資(環境・社会・ガバナンス)も重視するようになってきている。これらのことを踏まえて、市民普請と企業の連携に関して成功の要因として、①「市民普請の活動が企業の理念、方針、重点分野に合致しているか」、②「市民が貢献するエリアが明確になっている」、③「専門性(スキル、地域に詳しい、人脈)を持った非営

利組織などに市民と企業の仲介役になってもらえる」、④「責任の所在を明確にして、対外的に説明できるようにする」、⑤「必要に応じて、大学などの第三者に施工のレビューをしてもらう」が挙げられた。次に、国土交通省国土政策局地域振興課長の菊池雅彦氏より「共助による地域づくり——取り組みの視点と今後の展開——」と題して、豪雪地域における除雪作業を例に市民との協働のあり方について述べられた。高齢化や人口減少の進行により豪雪地域の雪処理の担い手は減少している。このような現状を受け、国土交通省では雪処理の担い手づくりに対し、支援する取り組みを進めている(克雪体制支援)。具体例として、岩手県滝沢市、鳥根県飯南市、山形県尾花沢市の行政以外の地





パネルディスカッションの様子

域運営組織による雪かきの取り組みが紹介され、地域で除雪に取り組むことで、市民の満足度の向上、地域づくりにつながる事例が示された。これらを踏まえた上で、市民主体の市民普請を実現するためには、地域運営組織とそのリーダーを育成することが必要であり、その支援のためのコーディネーター、中間支援組織、アドバイザーが重要であること、さらに行政サービス以上の地域管理を市民が主体的に実施することにより、地域が良くなったと満足度を高めることができる意義があることが示された。

これらの話題提供を踏まえ、真田氏をコーディネーターにパネルディスカッションが行われた。論点として、「持続可能な地域社会」としての市民主体の市民普請の意味とは何か?、「市民主体の市民普請に、官民学はどう関わるべきか?」が挙げられた。市民普請を公共事業の一部として位置づけることが目標であるが、そのためには、地元の人に関わりやすい仕組みづくりがまずスタート地点になるだろう。また、民間の力を借りるためには、既存のCSRのような枠組みの中でできることとそうでないことがあるだろう。技術的な支援については石積み学校のような地域との間に立つ中間支援組織の充実が不可欠である。また、行政サービスの質や地元負担部分についてどのように共通認識を作っていくかが行政的には求められている、といった意見が交わされた。

会場からは、行政の力には限界がある中で、自分たちで少しでも災害を軽減するということが今後の市民普請の役割が期待されているのではないか。気候変動による災害が懸念される中、市民普請をさらに発展させて明確な土木の役割の一部にする

議論があっても良いのではないか、といった市民普請への期待や、住民による公共工事事例への支援制度(海外には先行事例もある)や公共インフラの維持管理に対する支払制度の体系化や活用が重要ではないか、地元小企業へのCSRへの積極的参加の促し方が重要ではないか、といった具体的な制度論についても議論がなされた。土木学会としては、今後も議論の場をさまざまな場面で設けていくことを確認した。

## 土木コレクション 2019

TOKYO DOBOKU  
FROM 1964 TO  
過去から未来、新しいTOKYOへ

本年度の土木コレクションは、JR新宿駅西口の新宿駅西口広場イベントコナーで、11月14日(木)から17日(日)まで開催し、約3万5000人にご来場いただいた。テーマは、昨年度に引き続き、「土木コレクション2019 TOKYO DOBOKU FROM 1964 TO 過去から未来、新しいTOKYOへ」。

東京という都市はどんなイメージだろ

うか? 安全で、便利で、快適。高い生活水準を誇る世界都市だと答える人は多いだろう。しかし、昔からそうだったわけではない。震災、戦災からの復興や数多くの水害、交通渋滞、公害等を克服するため、時代ごとに最先端の技術を用いたインフラ整備が行われてきた。今回の展示では、こうして過去から未来へ脈々と受け継がれてきた土木の蓄積と東京の変貌を感じてもらえるよう、1964年に開催された東京オリンピックに関連する展示を軸に、関東大震災の復興から2020年のオリンピックに向けた土木プロジェクトの美しく繊細な手書き図面、芸術的な写真や貴重な映像を公開した。

本年度の新たなコンテンツとして、1920年代から現在まで整備されてきた東京の土木インフラ年表や1960年代以降の東京を上空から眺める航空写真ブースなど、時代の経過と共に変化していくインフラと東京を体感してもらうための仕掛けを取り入れた。また、1964年のオリンピックに関連したコンテンツの充実を図るとともに、当時の世相を感じる印象的な工事風景写真や地下鉄開通ポスターなどを多数展示した。これまで全国で展示してきた土木コレクションのうち、地下鉄銀座線や震災復興橋梁など、戦前戦後の東京

のインフラ整備に関連するコンテンツを中心に総数157枚のパネルやバナーによる展示を行った。

一方、昨年度、好評だった会場内の映像ブースを4カ所に増やし、当時の工事中の土木エンジニアの様子などを映す貴重な映像を日替わりで紹介した。展示期間内には、どぼくカフェ<sup>(注1)</sup>を同時開催し、東京の鉄道や高速道路、ランドスケープなどさまざまなテーマについてトークセッションを連日実施し、好評を博した。

本年度は西口広場全体を使用し、レイアウトは一体感を意識した。各展示物前の解説用パネル、受付スタッフ着用のヘルメットやユニフォーム、アンケート回答者へのプレゼント用クリアファイルなど、「土木」をモチーフにした印象的なデザインとした。プレゼント配布時にガチャガチャを回してもらったユニークな仕掛けも人を呼び込むきっかけとなった。会場内の解説パネルは全てに英語表記を併設し、海外の方に対するPRにも力を入れた。

土木コレクションは、これまで土木界に埋もれている貴重な史料に改めて光を当て、これらを活用し、市民のみなさんに土木の魅力伝える展示になるよう工夫を凝らしてきた。本年度は新しい展示コンテンツに加えて、オリンピックへの関心の高

さ、一体感のある展示空間などから、来場者の滞在時間が増加した。SNSでの反響を見ると、10年目を迎えた新宿西口広場での展示はより一層の知名度の高まりが感じられる。一方で、たまたま街を歩いていた人が思わず足を止めてしまうような展示という当初のコンセプトどおり、初めて来場するという方も例年より増加し、小学生の親子連れからお年寄り、海外の方まで幅広い層の方々に足を運んでいただいたことはうれしい限りである。アンケートでは、「東京都の発展を土木が確かに力強く後押ししていることがわかった」「地図や古写真、年表など素人でも変化をわかりやすく追うことができた」という意見や「全ての展示に英語で解説があり驚いた。こういう展示をもっとやるべき」など、市民の方や海外の方から今後の土木学会での広報活動の参考になる貴重な意見も多く挙がった。今後も土木コレクションで収集したコンテンツのもつ魅力を活かしつつ、市民のみなさんの土木に対する理解を深めていけるような企画を展開していきたい。

(注1)一般の方が「目に留まる」場所で「土木」をネタに楽しんでみよう！と大阪の商店街からスタートしたトークイベント



11月14日オープニングセレモニーのテープカット



人気のあった航空写真ブース。年代ごとの東京の変化を体感



土木コレクション特製ガチャガチャ



連日開催された「どぼくカフェ」



## 北海道支部

北海道支部では5月から11月にかけて札幌、北見、苫小牧、室蘭、函館において、関係機関協力のもとに「土木の日」関連行事を実施し、土木のイメージアップに努め、多くの参加者から好評を得た。

また、11月15日(金)には「北海道の災害と強靱化…行政と市民の取り組み」と題した「土木の日」記念講演会および選奨土木遺産認定書授賞式が、土木学会の関係者など73人の参加により札幌市内のホテルで開催された。

選奨土木遺産認定書授賞式では、新たに認定を受けた「岩松ダム」および「旧運河橋」について、認定書と銘板目録の授与が行われた後、管理者である、ほくでんおよび北海道開発局の担当者からそれぞれ当該土木遺産の概要を報告いただいた。

記念講演会では、最初に南富良野町長、



体験学習「橋の強さの秘密」(苫小牧高等専門学校)



選奨土木遺産授賞式・「土木の日」記念講演会(札幌サンプラザ)

とは「北海道の場合」のテーマで2018年北海道胆振東部地震の際に見られた大規模地盤変状により、重要性が再認識された宅地地盤の健全性についての講演があった。



イブニングシアター(北海道土木技術会 土木の日パネル展と共催)

池部彰氏が「2016年夏期豪雨の経験と教訓」のテーマで講演され、2016年8月豪雨の際の対応を振り返り「災害対応で大切なのは情報の収集、共有、発信」と述べられた。

次に、地盤品質判定士北海道部会、菊地朋貴氏から「地盤品質判定士と北海道での活動状況」、最後に地盤品質判定士北海道部会、工藤康雅氏から「宅地地盤のリスク

## 東北支部

東北支部では、「土木の日」関連特別行事の一環として、2004年度より、巨大地震災害や津波災害、さらには気候温暖化による河川海岸等への影響をテーマとして、防災に関するシンポジウムを開催してまいりました。

本年度は、災害現場における「データの活用」として、「防災とデータサイエンス」をテーマに開催しました。

データサイエンスとは、データを用いて新たな科学的および社会に有益な知見を引き出そうとするアプローチのことであり、各種データの高度利用化やリアルタイムに膨大なビッグデータが蓄積される昨今、「データ」を活用した新しい防災への期待が高まっています。不確実な災害、また想定外の災害が頻発する中、災害を予測し未然に防ぐためにも、これらデータの高度利活用への期待がますます高まっております。今回のシンポジウムでは、「電脳防災の実現をめざして」AIを活用したSNSからの災害情報の収集・分析」と題し、慶應義塾大学環境情報学部准教授山口真吾氏に基調講演をいただき、コーディネーター、コメンテーターおよび4名のパネリストを加えて、これから今後の防災



防災に関するシンポジウム「防災とデータサイエンス ～不確実な災害への対応～」

を支える技術として、各種データの利活用の技術動向や今後の可能性について紹介いただきながらパネルディスカッションを実施しました。来場者を含めた活発な質疑が展開され、土木に関する来場者の関心が高められた機会となりました。

また、同所において、土木の日パネル展を開催しました。

## 関東支部

関東支部では、関係機関の協力のもとに「土木の日」の関連行事を実施した。

会員・一般を対象とした「現場見学会（参加者29名）」では「東京国際空港 際内トンネル他築造等工事」と「首都高速1号羽田線 東品川栈橋・鮫洲埋立部更新工事」、親子を対象とした「親子見学会（参加者28名）」では、「東京外かく環状道路 本線トンネル（南行）大泉南工事」と「相鉄・東急直通線 新横浜駅（仮称）」の見学会を実施し、土木の魅力や土木技術のすばらしさを一般の方や将来を担う子どもたちに紹介し、首都圏で進められているビッグプロジェクトを実感していただいた。また、関東支部内の各技術研究所にご協力いただき、「技術研究所見学会」を実施した。小学生を中心に多数の参加を得て、建設業の役割や新技術開発への取り組みを紹介した。



現場見学会

2019年度も家族を含めた会員交流促進の一環として「土木のあ風景」写真コンテストを「土木の日」にちな



親子見学会

んで11月18日より募集を開始した。今回（第21回）に限り、本写真コンテストを主催する、土木学会関東支部交流部会幹事の審査によって入賞作品（最優秀賞、優秀賞など6点）を決定した（新型コロナウイルス感染拡大を受け、審査を予定していた技術研究発表会が中止になったため）。

関東支部には、新潟・山梨・群馬・栃木・茨城の五つの分会があり、各分会において記念講演会、親子見学会、現場見学会など各種イベントを実施し、土木工学のイメージアップと市民生活との関係の周知に活発に取り組んでいる。2019年度は台風19号の影響でイベントが中止になったものもあるが、山梨会「見学会」、新潟会「記念講演会、親子見学会」、群馬会「土木の日イベント in ぐんま2019」、茨城会「建設技術講演会」が開催され、土木の魅力を伝えていただいた。

## 中部支部

中部支部では、関係機関の協力をいただき、「土木の日」関連行事を8月から11月にかけて実施した。

学生間の交流および土木技術者との交流を目的とした「土木技術者と学生の交流会」として、土木魅力カルタ大会を開催した。土木系の学科を持つ大学、高等専門学校、大学の学生が土木構造物の魅力を伝えるカルタを作成し、ゲーム形式で学生と技術者の交流を深めた。学生の土木への情熱を引き出すことで、今後の進学や就職につながることを期待される。

土木に対する一般市民のイメージアップの面では、小学生から大人までを対象とした「市民見学会」



技術者と学生の交流会

を実施した。「市民見学会」では、静岡県でダムやバイパス工事の現場、愛知県で高速道路工事の現場や河川水門、石川県でバイパス工事やクルーズターミナル工事の現場などと幅広い分

野を見学し、普段見ることのできないバックヤード見学も盛り込むことで参加者から高い関心が寄せられた。

さらに、教職員、教員を目指す学生および理工系の学生の団体を対象とした「エクスカッション（体験型見学会）」では、名古屋市工業高校の教員が、伊勢湾水理環境実験センターと蒲郡港浚渫工事現場を見学し、土木に精通しない教員にも土木の役割、重要性を理解していただいた。高校生や高校進学を目指す学生に授業やその他の教育活動を通して土木に関する魅力発信をすることで、土木を目指す学生が増えることを期待している。

中部支部では、このほかにも学校、生涯学習の場等に講師を派遣する「出前講座」および「選奨土木遺産のパネル展示」等を行い、土木および土木学会の認知度向上とともに、将来の担い手の育成に努めている。



市民見学会



## 関西支部

関西支部では、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の活動として、「土木の日」関連行事関西地区連絡会の主催で、さまざまな企画（連絡会行事）を実施した。

「土木の日」ポスター制作では、「みんなのくらしをささえる土木〜まち・道・鉄道・港・エネルギー」をテーマに図案を募集し、子供部門（小学生以下）95作品、一般部門（中学生以上）368作品の応募の中から大阪府箕面市立西南小学校4年生の作品が最優秀賞に選ばれ、土木の日関連行事の広報ポスターに活用した（写真参照）。

「土木の日」コア行事のFCCフォーラムは、昨年「土木広報大賞2018最優秀賞」を受賞した「どぼくカフェ」の活動の意義を再認識する場として、7月13日に阪急電鉄中津駅近くの高架下で「どぼくカフェG4



2019年度の「土木の日」ポスター

速道路（株）に共催していたが、普段は一般開放していないNEXCO西日本茨木技術研修センターで、一昨年の台風災害で船舶が衝突した関空連絡橋の橋桁などさまざまな研修設備・材料を見学する機会にもなり、非常に多くの参加者があった。

## 中国支部

中国支部では、一般市民の方々に「土木」への理解を深めるため、第12回「身近な土木を描いてみよう！ 図画コンクール」を実施した。これは、次世代を担う子どもたちに、生活の中で何気なく見ている身近な構造物を描くことによって土木に親しみを持ってもらうことや、私たちの暮らしが土木技術に支えられていることを感じてもらうことを目的とした行事だ。



展示：広島市まちづくり市民交流プラザ



表彰式：ひろしまマリーナホップ

夏休みの課題として、中国5県の小中学校に依頼をし、107校から1169枚の応募があった。昨年の災害の復旧工事を描く作品も多く、小学生の作品では現場で働く重機や電車を生き生きと描く一方で、中学生は遠近法を使って橋を描くなど、社会基盤と日々の暮らしの関わりを豊

かな色彩やユニークなアングルで切り取るなど、審査員が目を見奪われる力作ぞろいだった。広島市近隣の小・中学校校長などによる審査会は困難をきわめ、ようやく優秀13点と佳作51点を選んだ。

10月5日、ひろしまマリーナホップにて、「ひろしま建設フェア2019」の一環で表彰式を行い、カープのマスコットキャラクター「スライリー」もお祝いに駆け付け、末国理事より受賞者一人ひとりに表彰状を手渡した。また、優秀作品を印刷した2020年のカレンダーを制作して、受賞者や関係者、関係機関に配布し「土木の日」および「くらしと土木の週間」行事をPRした。

入選作品は、広島市内をはじめ、土木学会本部や中国5県で展示を行い、多くの方のご来場をいただいた。



展示：土木学会本部



優秀作品を掲載した2020年のカレンダー

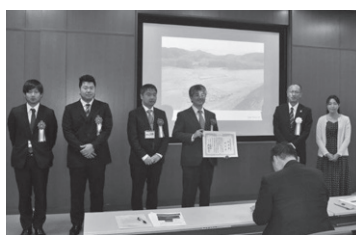
## 四国支部

四国支部では、例年と同様に、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の関連行事を関係機関のご協力のもと、一般市民、地域住民、小中学生・高校生等を対象に、土木に対するイメージアップを図るため、四国の各県内で、10月から11月にかけて多彩な行事を開催した。

高松市においては、10月31日に高松シンボルタワー1階デックスガレリアで「四国の土木コレクション&土木遺産パネル展」



特別講演会



選奨土木遺産認定書授賞式



近代土木遺産巡りバスツアー



四国の土木コレクション&土木遺産パネル展

を開催するとともに土木の日記念事業として、「選奨土木遺産認定書授賞式」(麻生<sup>あそ</sup> 堰<sup>づき</sup>／高知県四万十市)および土木学会塚田専務理事による「今そこにある『巨大災害の危機』南海トラフ地震のリスク」間違いなく「四国難」災害」と題した特別講演会を開催した。また、11月30日には市民や学生に土木に興味や関心を持つってもらうことを目的とし、東洋のマチュピチュ「マイントピア別子(東平地区)」、日本最古の5連マルチプルアーチ式ダム「豊稔池堰堤」、豪雨や台風の影響で崩落した「丸亀城石垣」を巡る「近代土木遺産巡りバスツアー」を実施した。

主な地区行事としては、各県において小中学生や工業高校・高専生を対象に、土木・建築工事などの建設現場や普段は立ち入ることのできないダムや発電所の見学会を実施し、建設産業および社会資本整備への一般理解の醸成、建設産業への魅力発信などに努めた。

さらに大学や高専での土木パネルや土木技術に親しむ企画展示および土木関連の実験などを開催し、多くの参加者に土木技術の知見を深めていただいた。

## 西部支部

福岡地区では、10月20日に海の中道海浜公園で「土木の日ファミリーフェスタ2019」が開催された。建設機械乗車体験、クイズラリー、子ども向け土木実験などが行われ、405名(クイズラリー回答者数)の参加者があった。

北九州地区では、8月23～24日に西日本総合展示場新館で「北九州ゆめみらいワーク2019」を夢を描く!」が開催された。134の出展団体によりプレゼンテーション大会、キッズスタンプラリー、高校生クイズラリーなどが行われ、7000名を超える来場者で賑わった。

佐賀地区では、11月9～10日に佐賀県立森林公園で「さが土木フェア2019」が開催された。パネル展示、建設機械展示・乗車体験などが行われ、のべ1900名の来場者で賑わった。

長崎地区では、11月16～17日に「DOV

OCフェア2019 島原半島うみ

やま街道土木遺産ツアー」、「DOV

OCフェア2019 土木おもしろ

体験隊」、「DOVOCフェア

2019 浜町パネル・模型展」が

開催され、土木遺産ツアー、実験教

室に151名の方々が参加された。



土木の日ファミリーフェスタ2019 (福岡地区)



DOVOCフェア2019 浜町パネル・模型展 (長崎地区)

熊本地区では、11月16～17日に「親子で行く土木に親しむバスツアー」、「熊本の土木工事現場見学バスツアー」、「わくわくドボク体験ツアー in 八代」が開催され、熊本城、万田抗、立野ダム建設工事、阿蘇大橋などを巡った。

宮崎地区では、11月23～24日にイオンモール宮崎で「宮崎県「土木の日」パネル展」が開催された。パネルおよび模型などを展示し、市民へ公開した。

鹿児島地区では、11月16日にマリンプールがしまで「土木フェスタ in マリンポール2019」が開催され、14の出展団体により建設重機体験、スタンプラリーなどが行われた。好天にも恵まれ、家族連れなど約5500名の方々が来場された。

沖縄地区では、11月6日にパレット市民劇場で「沖縄の土木技術を世界に発信する会 第24回シンポジウム」建設業界での多様な人材の活用に向けて」が開催され、256名の方々が参加された。